

『初等教育資料』一九六一年九月（文部省初等教育課編／東洋館出版社）

実験的研究における教師の心がまえ

矢口 新

一

卒直に言つて、実験的研究だからといつて教師に特別に心構えが必要だとは思つていない。当り前のことを当り前にやつて行くことだと思つてゐる。教育という仕事そのものが実は毎日実験的研究の継続ではないか。こういつてしまえば、みもふたもないようだが。

実験的研究という言葉は、現実には、特殊なふんい気をもつてゐる。国や県で、毎年或る学校を実験学校とか研究指定学校とかとして指定する。そうすると実験研究がはじまるのである。ここで問題にする教師の心構えというものも、そういう実験学校として指定された学校の教師の心がまえということであろう。

しかしその前に、考えておくべき問題があるのではないか。それは日常的な教師の実践と研究の意味において実験されることは絶対に許さるべきことでない。その意味では、実験学校における実験であろうと、何であろうと、教育はあくまで第一義的に教育の実践であるべきである。生半可な態度で、実験的であることは

許されない。併しこのことは、その実践が、研究の材料として、分析され、整理され、批判されてならないということではない。否、教育実践は常に、一回的な真剣勝負としての実践であるが故に、その真剣勝負が常に、教師を育てることになるべきである。過ぎ去つた教育はよりよく生きる教師にとつて、常に実験として生かされなければならぬ。そういう意味では毎日が実験的研究の毎日でなければならない。それが、本来の自覚的教師のあり方でなければならない。現在わが国で慣習として行なわれている実験学校や研究学校の実験研究においても、この本質は何等かわらない。いな、実験学校というものも、このような自覚的教師の心がまえの上に成立つものである。

二

実験学校における実験も、本質的には上のよきな意味の実験研究とかわりがないが、ただ、それが、より明確な企画と組織においてなされるということであろう。そこにそれにたずさわ

る教師の特殊な努力や態度が要求される。しかし、それも本質的には、日常におけるあるべき心構えとかわるものではない。

教育における実験は、ただ、新しいことをやつてみるという実験ではあり得ない。教育は常に最善の教育と確信して行ふべきものである。その点は毎日の実践がそうあるべきであるのと何等かわる所はない。だから新しい企画に依つて行なう教育も、精細に計画されたものにもとづいて、すぐれた実践としての確信の上になさるべきものである。

同時にその実践の結果は、徹底的に、科学的に分析さるべきものである。特に実験学校を設けて行なう場合は、そこに重点をおいてゐるといつてもよい。つまり実践のデータは、すべて白日のもとにさらされなければならないのである。教師の日常の実践では不可能のようなこと、例えば一つの実践を幾つか観察記録をとる、後から分析するといった如きことは、実験学校なるが故に可能となるのである。そこには、実践者としての教師は、とくに徹底した心構えが必要である。自己の実践がすべてあらわにさらされるといふ光榮ある被験者の態度が必要である。

このことは、しかし、単なる個人的心構えの問題ではない。教育実験の計画的な実施は、当然、共同研究として行なわらるべきものであり、学校全体として、ないしは学校以外の研究者、

実践者との共同において行なわれなければならない。つまり実践学校は社会的な意識をもっているのである。

従って、実験研究をする学校は、相互に、己れを白日のもとにさらし、相互に研究者となるような研究の共同の仲間としての意義をもたなければならない。そういう学校でなければ、実験学校としては成立しないのである。それはつまり、最も厳正な意味で、研究の共同体でなければならぬ。そのためには、各人の心構えには、きびしい自己否定が要求されるかも知れない。しかし、この自己否定は、単なる否定でなく、肯定をした上での否定であり、否定の上での肯定である。

私自身十年來ある学校で実験研究をつづけているが、私が最も注意していることは「仲よく」「ざつぐばらんに」「きびしく」などということである。仲はよいが、きびしく批判がし合える、ざつぐばらんに話し合えるということである。そういうものがあって、十年つづけて、共同の実験的研究が行なえるのではないかと思っている。その意味では、実験研究を通じて、教師が成長し、共同社会ができ、真の学校が育つとも言えるのである。それは研究についての心構えである。教師は実践者であって、研究者ではない。働く者であって、みるものではない。類型的にみれば、なる程その通りであるが、教育の仕事そのものは必ずしもそれで割り切れ

るものではない。とくに教師が教師としての自覚に生きようとするとき、ただ実践して居ればよいというものではない。そこには必ず自己の実践に対する反省がなければならず、それを通じて自己を自覚し、高めようとする。そのような実践から反省、自覚から更に実践という環境のない所に、教師という自覚はない。自覚された教師はない。教師の心がまえなどという場合には、そういう自覚者としての教師の心構えが題とされている。

三

日本の実験学校や研究学校は、年毎にかわつたりする習慣がある。この頃は次第に二年、三年と行なわれることも多くなつたが、全体としては、行事的性格が強い。指定をうけて、何かをやつて、発表をして、おしまになる。教師の心構えも、そういう実験学校の教師の心構えと考えられ勝ちである。

しかし実験研究というのは、そう簡単に二年や三年で目はなのつくものはないといった方がよいであろう。少くとも五年或は十年というのが一つの実験研究の期間ではないだろうか。教育実験とはそういうものである。

何かをやつてみる、その効果を明らかにするというのが実験研究の基本的な形式であるが、教育の効果などというものは、そう簡単に明らかになるものではない。それはあらゆる要素

の総合されたものであるから、一つの実験的研究が、一つの結果と簡単に結びつくと考えてはならない。小学校ならば、一年から六年の六年間位は、実験してみることによつて多少とも、何かがわかるというように気長に考えるべきであろう。それだけの息の長さが教師には要求されるのである。そういう息の長さは、ただ息が長いというだけでなく、同時に、多くの教師の協力を必要とする。

日本の社会は概して、気長に実験の結果をまつという持続性にとぼしい。実験をして、実証的によいものをつくりあげて、それにより社会を進歩させて行こうとする考え方は少ない。むしろ早急である。教師もその中であつてやはり早急である。そういうなかで、本来の教育実験を行なつて、確実なものをさがし求めようとすることは、なかなか骨の折れることである。教師に余程の覚悟がなくてはならぬ。自主独往の精神が強く要請されるのである。

本来実験的研究というのは、現在を否定する創造的な精神に基盤をおいている。よりよいものを生み出すいとなみである。それは一朝一夕にできるものではない。しかも、人間の易きにながれる惰性の精神を克服しなくてはならぬ。個人的にも、社会的にも、そうである。理想に生きつづける精神の持続こそ成果を生み出すもとである。

〈国立教育研究所所員〉